085033-000-2

187-134

紫式部

青木　義正／著

M33

DBB-0465

青木義正著

# 紫式部

二書房合梓

# 序

青木君之爲高等女學校長、專用意於德性之涵養、未數年、學生之風儀有大可觀者焉、頃者、執務之暇、纂述紫式部一編、見眎且徵一言、余受而讀之、主摘出式部淑德貞操散見于諸書者、間自附所見、亦皆鑿々有證左矣、夫世之稱式部者、率擧其才藻、而略性行、君之斯編、蓋若有慨於此者焉、顧本朝中古、朝綱漸弛、至壼奥之混濁、更有甚焉者、當是時、德操若式部、可謂沙中之金、泥中之蓮、汚而不染者矣、宜矣、其文章至今膾炙人口而不止也、若夫式部之才藻而無其性行、吾知其未

足以傳于世也。今斯編之出、不啻使式部淑德著於世、亦可以使後進女子有所矜式焉、則有裨補於世教、豈其爲鮮哉、因爲書所感以質於君、併諗讀斯編者。

明治三十三年二月下浣

高知縣高等女學校教諭茨木定興撰



光源氏の物がたり世にかゝやきて、むらさき式部のいろあせず、いひ傳ふるものから、なほ其のざにのほどを、とかくさたして、その心おきての、さらにまさゝまなるに、おもひいたらぬのみかは、はてはては、妄語なり、くげんあるべしなどとて、經かきて供養せしものありしは、いとくちをしきわざならずや。さるを、こたび青木大人の物せられしこの一卷よ、つぎ〳〵よみもてゆくに、いとつばらにとき論はれて、紫のゆかりのいろ、こまやかに匂ひいて、さにのほども、いよ〳〵顯はれて、特にこゝろお

きてのかくれたるはあらじかし。あはれ〳〵このさうしよ、世々の女子のかゞみぐさともなりなむ。はたゆかりのその人のため、千部の功德にもまさりぬべし。かくこのはじめにかいしるすものは、

高知縣高等女學校教諭入交好德



# 自序

女子ノ性德ヲ涵養セント欲セハ、無味乾燥ナル抽象的理論ヲ說テ、之ヲ冷ナル理性ニ問ハムヨリ、寧、完全ナル摸範的人物ヲ示シテ、之ヲ溫ナル感情ニ訴フルノ有効ナルニ如カサルナリ。予、乏ヲ女學校長ニ承ケテヨリ、茲ニ見ルアリ、爾來此種人物ヲ求ムルニ汲々タリシト雖、而モ未タ得ル能ハサルヲ遺憾トセリ。頃日、偶、紫式部日記ヲ繙キ、通讀一過、即、案ヲ拍テ曰、是所謂摸範的人物タルニ近シト。因テ之レヲ諸書ニ考ヘ、之ヲ識者ニ質シ、且、聊、評論ヲ加

ヘテ、遂ニ紫式部一篇ヲ編述セリ。

抑、我國古來貞女烈婦ノ傳記ニ乏シカラスト雖、概、逆境ニ處シテ悲慘ノ歴史ヲ殘セル者ニアラサルヨリハ、其性行多クハ中庸ヲ失シテ、婦女ノ本領ヲ脫却セル女丈夫ノ類ニアラサルハナシ、其能ク順境ニ立テ、貞順靜淑ノ美德ヲ完クセル者ニ至テハ、寥々晨星ノ如シ。紫式部ノ生ルヽ九百餘年ノ昔ニアリ、古今時ヲ異ニシ、文野俗ヲ同クセサルコト、霄壤啻ナラサルヲ以テ、其性情行徑、盡ク今世ノ女子ヲシテ矜式セシムルニ足ラサル者アリト雖、而モ



其歴史ヤ悲慘ナラズ、其性行ヤ能ク中庸ニ合シ、且、今世女子ノ陷リ易キ通弊ヲ救フニ於テ、頗、適切ナルモノアルヲ認ム、是、予ガ淺學不才ヲ顧ミス、敢テ此著アル所以ナリ。今ノ女學生タル者、之ヲ以テ模範トナシ、其流風餘韻ヲ仰テ以テ婦德ノ涵養ニ資シ、兼テ當世ノ務ヲ講セハ、日本婦女ノ本領ヲ失ハサルニ庶幾カラムカ。

明治三十二年二月下浣

青木義正識

# 緒言

一、本書ハ元、修身教授ノ材料トシテ編輯セルモノ、今聊、事項ヲ追加シ、文辞ヲ修正シテ、敢テ自ラ揆ラス、遂ニ世ニ公ニスルコトヽナセリ。故ニ學校ノ方針トシテ、生徒ニ實行ヲ促シツヽアル事項ニ就キテハ、記述ノ體、自ラ丁寧ニ渉ルノ傾向ヲ生セリ。

一、本書ノ骨子トシテ引用セル紫式部日記ハ、由來、一種難解ノ文字ナルヲ以テ、今讀者ノ便ヲ計リ、其大意ヲ摘ミテ之ヲ普通文ニ譯述セリ。若シ誤譯アラハ、其ハ偏ニ編者ガ古文ニ習ハサルノ罪ノミ。

一、本書ノ編述ニ就キテハ、事實ノ考證ニ、古文ノ解釋ニ、入交



好德氏ノ示教ヲ得シコト頗多シ。去レド、通篇ノ結構ハ一ニ編者ガ筆ニ成レリ。茲ニ同氏ノ勞ヲ謝スルト共ニ、本書責任ノ在ル所ヲ明ニス。

第二千五百六十回　紀元節後五日高知城北

江陽ノ寓ニ於テ

編者識

## 紫式部系圖

- ◎良門 閑院左大臣冬嗣ノ第六子、內舍人、正六位上、贈太政大臣正一位
  - 利基 從四位上、堤中納言ト號ス、歌人
    - 兼輔 從三位、右中將
      - 雅正 從四位下 刑部少輔
        - 爲賴 從四位下大皇大后宮亮 歌人、母ハ右大臣定方ノ女
          - 爲時 正四位下越後守、儒者、歌人
      - 伊祐 從四位下因幡守 讃岐守
        - 賴成 從四位下因幡守 實ハ具平親王ノ子
      - 惟規 從五位下式部丞、母ハ常陸介爲信ノ女
      - 惟通 從五位下安藝守
      - 定暹 阿闍梨
      - 女子 紫式部、母ハ惟規ニ同ジ、左衛門權佐藤原宣孝ニ嫁ス
      - 女子 賢子、大宰大貳高階成章ニ嫁ス、因テ大貳三位ト號ス、後一條帝ノ御乳母
      - 女子 辨局、後冷泉帝ノ御乳母

# 紫式部

青木義正纂述

## 第一　式部の傳記

紀元一千六百五十餘年、第六十六代一條帝の御代に當り、淑德一世に高く、才學古今にすぐれて、千歲の下、婦女の摸範として欽慕するに足るべき、賢婦人こそ現はれたれ、其を紫式部其人とす。

式部の父を藤原爲時といふ、母は常陸介爲信の女にして、一條帝の乳母なり。爲時は文章博士菅原文時の門に入り、文章生より、式部丞、藏人辨を歷て、正四位下越後守となりし有名

の儒者にして、兼ねて又、和歌をも能くせり。爲時に四子あり、長を惟規といひ、亦歌を能くして、其作多く後拾遺以後の選集に入れり、次を惟通といひ、又其次を定暹といふ、季は女子にして紫式部即これなり。

式部生れて容姿端麗、資性穎敏、よく一を聞きて十を知るの才あるが上に、父に學びて、博く和漢の史籍に渉り、朝廷の典禮故實にも暗からず、和歌文章はいふも更なり、音樂其他の諸藝にまでも達せしは、其著はせる源氏物語、日記を見て知るべし。年、漸長ずるに及んで、左衛門權佐藤原宣孝に嫁し、能く夫に事へて女子二人を擧けぬ、長女は名を賢子といひ、大貳三位高階成章に嫁して、大貳三位と稱へ、後に後一條帝の



乳母となりしが、亦才學ありて、和歌文章を能くし、狹衣物語を著はせり。次女は名を辨、局といひ、これ亦、後に後冷泉帝の乳母となれり、かく二女ともに、皇室の御乳母となりて、才名ありしは、式部が教育の素ありしによらずんはあらず。

然るに、一條帝の長保三年四月、夫宣孝、身まかりければ、これより、式部は寡居して、二人の女子を養育をること三四年、其間、綠の髪をこぼちて、世を背き、佛門に入らんと思ひしこと、屢々なりしも果さず、遂に、寛弘二三年の頃、中宮彰子の官女に召し出だされて、心ならずも、宮中に奉仕する身となれり。

中宮彰子と申すは、左大臣藤原道長の長女にして、年十二の

時、宮に入りて女御となり、次で中宮に進み、寛弘五年に、後一條帝を生み、其翌年又後朱雀帝を生み給ひしかば、遂に皇后に立ち給ひしが、後には祝髪して上東門院と號し給へり。性、仁慈にして、且、深く學問を好み給ひしにより、父道長は、當時、才學容色、兼ね備へたる官女ども、多く召し出だして、左右に侍せしめしが、式部も亦其中に數へられて宮中に入り、奉仕多年、頗、中宮の寵遇を受けたりといふ。

斯くて、式部は後一條帝の萬壽二年頃までは、宮仕したりと見えけるが、其卒去せしは、果して、何時の頃なりしか、明ならず。國史略、年契などには、正暦三年紫式部卒すと記せるも、此正暦といふは、長保、寛弘よりも前の年號なれば、こは、いふま



でもなく、誤りならむ。墓は京都紫野白毫院の西雲林院の南にありといふ。

式部の年齢は確ならず、其始めて宮中に仕へしは、夫に別れしより、三四年の後にして、宮仕中、數多の官女の中にありて、常に、自ら年長けたるを耻ぢしこと、屢々日記中に散見せるより考ふるも、當時三十年よりは少からざりしものゝ如し、果して然りとするときは、萬壽二年には、既に五十三四の年齢を保ちしなり。

紫式部といへるは、通稱にして本名にあらず、式部の姓は藤原氏なるを以て、本名は藤式部と稱せしなるべし。式部がこの通稱を得しにつきては、諸説區々に渉れり。或は、源氏物語

の中なる、紫の上の事を、いと見事に書きたれば、此名を負ひたるなりといひ、又は、藤式部にては何となく、玄妙に聞えさるにより、藤の色に因みて、紫式部と名づけたるなりといひ、又は、式部は一條帝乳母の子なれば、帝曾て式部を指し給ひて、これは我がゆかりの者なり云々、と宣ひしより、斯くは稱せしなどいへど、其自ら誌せる日記などによりて、推し考ふるに、第一の說、最信ずべきもの〻如し。

欠

MISSING

ひけれは、式部、石山寺に通夜して、籠りける折しも、八月十五夜の明月、湖水に映じて、心の澄みたるまゝ、物語の風情、空に浮びけれは、忘れぬうちにとて、佛前にありし大般若の料紙を、本尊に借りうけて、先、須磨、明石の両卷を書き始めける、これにより、須磨の卷に「今宵は十五夜なりけりとおぼし出でゝ云々」と、記せりなどいへど、こは、年代の齟齬せるのみならず、佛家の迷信に基ける不稽の俗説として、學者の取らざるところなり。但、石山寺内に源氏の間と名づけて、式部が畫像をかけ、机硯など設けたるは、後世好事家の仮託なるべし。されは、源語は、式部が夫宣孝に別れし後、未だ宮仕せざりし前の、三四年間に成れるを、此事、いつしか宮中に聞えて、遂に

召し出ださるゝに至れりとの説、日記の文意などより推して、信ずべきところあるが如し。

また、源語の結構を考へ、其大綱を作りしは、父、爲時にして、式部は、只、其細目を補ひしなりといひ、或は、道長の加筆ありなどいふ説もあれど、思想文章とも、確に女子の筆と見とむべく、其よく統一せるところは、また二人の手に成りたる者と、見るべからず。されば、これも亦、牽強の説と云はざるを得ず。

且、式部の著作は、獨、源語一篇のみにあらず、これを、他の著作なる日記に徴するも、式部がいみじく、文章の才に長じて、源語の如き大作も、また優に作り得べき才筆を有せしことは、更に疑を容るべきにあらず。かく、佛陀の冥助ありしといひ、



他人の助力に成りしといはるゝところ、却て益々此物語が、非凡の一大傑作たることを証すべきなれ。

日記は、式部が、夫宣孝に別れし後、宮中に奉仕せし時の記錄にして、今日に存せるものは、一篇中の斷片に過ぎず。其中宮に仕へし有樣、道長の懸想を拒みしこと、日本紀の局の稱を得しことなど、詳にこれを記せり。こは、固より、さまで經營せずして、事實と思想とを、書き流したる隨筆物なれば、其文章は、源語の莊麗緻密なるに及はずと雖、思のまゝに筆を下して、毫も苦心修飾の痕を見ず、輕快にして、簡潔なるところなど、却て見るべきところあるのみならず、また、實に式部の性行人物を知るに足るべき良書なり。

式部は、たゞに文章に於て、古今獨歩と稱すべきのみにあらず、又和歌をも能くして、其名作の勅撰集に入れるもの少からず。清少納言、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔等は、當時屈指の才媛にして、斯の道に堪能なりしといへども、何れも、式部の右に出づる者なし。彼の紫式部歌集及源語、日記を見れば、また以て式部が歌道に秀でしことを知るべきなり。

式部は、また漢文學にも長せり、中宮、曾て白氏文集を讀み給はんとて、式部に教へよと宣ひしを、辞みかねて、寛弘四年の夏頃より、人の居らざる間に、忍びて、樂府の篇二卷ばかりを、講じ奉りしこと、及、前に引ける、幼少より史記を暗誦せしこと、又は亡夫の遺書をば、忍びて讀みたることなど、日記中に散



見せるによりても知るべし。されど、當時の社會は、女子の公然、漢文讀むことを、いたく咎むる風なりしを以て、謹慎なる式部が、人目を忍びて、ひろかにこれを修業せし、其苦心勉強の狀、また想ひ見るべきなり。

## 第三、式部の德操

式部は、只に博學なる才媛、文學界の大家として、尊崇すべきのみにあらず、其人となり、順良謹愼にして、すこしも己の才學に誇らず、且高潔貞淑にして、よく其婦德を全ふせしところ、實に婦女の摸範として、千歳の下、うゞろに、欽慕の情に堪へさらしむるものあり。而して、式部の式部たる所以も、亦彼の豐富なる才學にはあらずして、寧、此の高潔なる德操の上にありといふべし。

凡、人の品行は、社會のために感化せられ易きものなれば、道德高き社會にありては、人々、其德操を全ふせんこと、敢て難きことにあらずと雖、道德頽廢せる社會の中にありながら、



毅然として、獨、德義を守り、貞操を保たんことは、いと難き業にして、柔婉纖弱なる婦女子に於て、殊に然りとするなり。今式部が生存せし社會は、如何なる社會にして、當時の風俗は如何なりしかを見るときは、益々、式部其人の、高潔玲瓏なりしを知るに於て餘あるべし。

當時は恰も、藤原氏全盛の時代にして、一族朝廷に駢列せるに、實權は、却て地方の豪族に委して顧みざれば、廟堂の上、人多くして、事少く、風氣、漸、文弱に流れて、奢侈に耽けり。濫猥の醜聲、聞くに堪へず、優にやさしき月卿雲客は、窈窕花の如き才媛佳人と相混じて、花の晨、月の夕、詩歌管絃の歡樂を恣にするなど、社會の制裁極めて弱く、風俗全く亂れて、偸安淫逸

の狀、復、いふに忍びさるものありき。されば、此間に卓立して、獨、其婦德を全ふせし紫式部其人は、實に砂中の黃金、泥中の蓮花と稱すべく、又歲、寒ふして、愈々青々たる松柏のめでたき操にも比すべきなり。

式部の人物性行を觀察せむとするには、源語によるよりも、寧、日記によるを適當なりとす。もと、源語は、世人の繙讀に供せむがために書ける作物語なれば、其立意は、寧修飾に傾きて、時好に媚びたるの嫌あれども、日記は然らず、全く、自已の覺書にして、云はゞ、天眞爛熳の筆なり。故に、式部の性行用意を知らむとするには、日記こそ、倔强の資料なれと信ずるものから、以下、聊、日記中の數節を抄譯すべし。



式部が、中宮の官女に撰はれしこと、道長及其他の人々に懸想せられしことなどによりて考ふるに、容色、人にすぐれて艶麗なりしは、明なる事實なるべきに、式部自身は、却て、其容色につきて、左の如く謙遜せり。

寛弘五年九月、中宮御產の前、痛く惱み給ひければ、御附の官女ども、何れも、泣き悲みて、常々、美人の聞えありし小中將、宰相などいへる人々すら、化粧なども、涙に濡れうこなはれ、平素の顏とは、いたく變りて、見苦しかりしが、まして、自分の顏は、常さへ、いと醜き方なれば、如何に見苦しかりけむ。されど、其時は、かゝる悲歎の折柄なれば、互に覺えずありしこそ、却て幸なりしか。

又御産後、御湯殿儀式の時、未た、御前の白き裝飾をもかへず、萬の物、曇りなき御前に居る官女どもの有樣、又は衣服などの色合さへ、美しく、明なるを見渡すに、恰も、墨繪にかきたる人の顏の毛際の鮮かなる如く、實に美しく見えたり。さなきだに、自分は、年長けたる身なれば、かく、人々の美しき中に、立ち交り居ることの耻かしき心地すれば、晝間は、局より出でざりき。

式部が、すべての場合に於て、身を持すること、いと謹慎に、周圍腐敗の氣風に對して、常に嚴しく、警戒を取りしことは、また左の數節によりて知らる。

一條帝、道長の邸へ行幸の翌夜、宮ノ亮經賴等、三人の男子



來りて、輿に乘り、障子取り除けよと、式部を責め給へど、高位なる人々の、餘り下坐し給はんも、折柄とはいひながら、似合はしからぬことなり。若き女ならば、物の道理をも、知らぬはずとて、淺はかなる罪も、赦さるべけれど、我はかく、年長けたるに、若き殿上人などゝ遊ぶを、人に見らるゝも、猥がはしく、耻かしと思へば、障子をも取り放たざりき。

又五節の舞の時、すき間もなく、宮中に、燈し連ねたる燭の光は、晝よりも明るき中を、舞妓ども、何とも思はず、憚る氣色もなく、揚々と歩み入る樣どもを見るに、實に淺ましく、破廉耻なる業かなと思へど、我もまた、其場にありて、殿上人の正面にさし向ひ、只、紙燭をさして見られぬはかり、す

こしもかくるゝ所なければ、只、人の上のみ、さ思ふべきにあらず、式部もまた、耻かしさも知らぬ女かなと、殿上人など、思ふらむと、思ひ出づるも、先、胸ふさがるなり。

もし、我等を彼の舞妓などのやうに、かゝる御前に出でよとあらは、只、さまよひ歩くはかりならむ、彼が如く、耻かし氣もなく、立ち出でんとは、思ひがけもなし。されど、目に見えずして、淺ましく、移りゆくものは人心なり。我も亦、今より後は、この浮きたる世に馴れて、破廉耻者になるかも、測り知られずなど、我身の上の夢のやうに、思ひつゞけられて、いま〳〵しく覺ゆれは、例のことながら、物見などには、眼のとまることなかりき。



若き官女の中に、小太夫、源式部、小兵衛丞なども、いと美しき人にて、大方の殿上人、眼をとめぬはなし、誰しも、かく宮仕などする身は、思ひかけもして、不意に、殿上人等に見らるゝことあれは、常に、人なき隈々も、用心を怠るべからず。

上の三人などは、深き用意もなきゆゑ、殿上人等、殆、見のこす人もなし。

これも亦、一條帝、道長の邸へ行幸の時、筑前ノ命婦といひし官女、圓融院御在位の時、この邸へ、しば〳〵行幸ありし昔を想ひ起して、樣々と話すを、其話の中には、忌み憚るべきこともありぬべけれは、式部は、わさとあしらはず、几帳をへだてゝ隱れ居たり。もし、嗚呼如何なりけむなどいひ

て、問ふ人だにあらば、忌み憚るべきことも、何もかも、水なで打ちこぼすごとく、話すべきやうなりき。

寛弘七年正月、後朱雀帝御誕生、五十日の祝典の狀況を記せる所に、左の一節あり。又以て、益々、當時頽敗せる宮中の風紀と、高潔なる式部の心事とを見るべきなり。

此御式は、事の外なる盛典にて、左右大臣、内大臣、其他高位の人々、内裏、中宮附の官女、數多列坐して、管絃の遊などあり。遊興はて丶後、人々猥がはしく、戯れ給ひし果には、いみじき過などありて、實に笑止なりしこそ、見る人の身さへ、冷ゆる心地したれ。

式部は、また、自己の學識につきて、左の如く謙遜せり、用心良



苦の情、實に、文外に溢る丶を見るべし。

一條帝、式部の書ける源氏物語を御覽ありて、此作者は、日本紀を讀みたりと見えて、實に才ある人なるべしと、宣はせけるを、左衛門、内侍、ふと聞きて、式部は、いと才學にはこると、帝、宣はせしなど、殿上人等に、いひ散らして、式部の別名を、日本紀、御局とつけたるは、いと可笑しきことなり。自身は、常に、我か召使の女の前にてさへ、何事も、深く慎み居るものを、帝のおはする所などにて、才をてらひ、人にはこりなどすることのあるべしや。

さて、式部は、これまで讀みし書物などには、眼もとめぎしてありしに、いよ〳〵、左衛門、内侍などの謗を聞きしかば、

人々も傳へ聞きて、如何に憎むらむと、耻かしさに、御屏風にかきたる文字をたに、讀まぬさまして、居たりしを、餘儀なき事情より、中宮に、白氏文集、敎へ奉ることとはなれり。されど、中宮にも亦、式部の心を知り給ひてにや、いと忍び給へり。此事、もし、彼の内侍など聞き知りたらむには、如何に憎み謗らむものをと、恐ろしく、すべて、世の中は、ことわざしげく、憂きものなり。

當時の人々、式部が、學問好むを知りて、男子さへ、學問好みて、學者ぶる人は、見苦しき者なるを、まして、女子の身としては、いとあるまじき業なりなど、謗る者あるを、聞きとめて後は、世上の口の、恐ろしさに、一といふ字をさへ、書くこと



ともせぬゆゑ、文字をかくこと、拙くして、淺まし。

式部が、最愛の夫、宣孝に別れて後、悲歎の餘、綠の髪をこぼちて、佛門に歸せんとするの情、常に切なりしも、中宮の御寵遇と、我子の愛情とに、ほたされて、遂に、其本意を果さゞりしことは、また左の數節によりて、知らる。

行幸近くなりければ、殿内は、立派に造りみがき、種々の珍しき菊など、植ゑ立てたるを、朝霧のたえ間より、見渡したるは、實に、若返るべき心地すなり。我もし、思ふことなき身ならば、面しろ、可笑しく、若やぎて、此浮世を過ぐすべきに、却て、面しろきこと、愛たきことを見聞くにつけて、兼ねて思ひ立ちし、佛法修行の心の引く方強く、亡き夫のみ戀し

く、歎かはしきことの増さるは、苦しきことなり。されど、如何に思ふとも詮なければ、今は、はや忘れなむ、却て罪深く、後世の障ともならむなど、思ひつゞけて、夜明くれば、水鳥の思ふことなけに、池に遊びあへるを、打ち眺めて、

水鳥を水の上とやよるに見む
われも浮きたる世をすぐしつゝ

他人は、何といふとも、只、佛道に歸依して、撓みなく、經を習はむ、世の中の厭はしきことには、すべて露はかりも、心とまらぬやうになりたらば、聖にもならむ、ゆめ、怠るべきにあらず、さりながら、かく一向に、世を背かんとするも、佛の來迎をうけて、雲に上らず、此世にある間は、二人の女子に



はたされて、心のまゝならず、故に、一向に世をも背き得ず、ためらひ居るなり。

中宮にも、式部は、迚も、打ちとけては見えじと思ひしに、豫想に違ひて、他の官女などよりは、却て、睦ましくなりたることよと、宣ひしこと、しば〳〵なりき。

當時、勢、朝野を傾け、富、皇室を凌ぎ、左大臣として、中宮の父君として、權勢、飛鳥をも落すべく、望月のかけたることなき、道長の懸想に遇ひながら、而も、其感觸を害はず、いと、婉曲に拒みとげて、自己の德操を全ふせしは、また得がたき貞女の鑑と稱すべく、且、其外形の極めて柔婉謹慎なるに拘らず、其内心には、權威に屈せざる、雄々しき氣象を有せしこと、眞に、外

柔内剛の美德にかなへりといふべし。

或時、源氏物語の中宮の御前にありけるを、道長公、御覽じて、例のわけもなき、戯れ言など、出で來りたる序に、しわ紙に歌かきて、梅の枝に結びつけ、式部に賜はりければ、式部もまた、返歌奉れり。

道長の歌

すきものと名にし立てれば見る人の
折らですぐるはあらじとぞ思ふ

返歌

人にまた折られぬものを誰かこの
すきものぞとは口ならしけむ



或時、渡殿に寢ねたる夜、戸を叩き、音づるゝ人ありとは聞き知りたれど、恐ろしさに、知らぬふりして、音もせぜ、明したる、其翌朝、道長公の所より、歌を送られたれば、式部もまた、返歌奉れり。

道長の歌

よもすがら水雞よりけになくく
まきの戸口にたゝきわびぬる

返歌

たゞならじとばかり叩く水雞ゆゑ
あけてはいがにくやしからまし

以上に抄譯せる、日記の文を讀むときは、無用の筆を費すま

でもなく、貞淑謹慎なる式部の人物、躍如として、目前に現はるゝの思あるべし。

斯くまで謹慎に、斯くまで貞淑なる式部が、何故に、彼の敗德亂倫の嫌ある源語を作りしか、これ古來、式部の身邊に蝟集せる、解き難き疑問なり。これにつきて、古より、學者の見解は、區々に渉りて、幾多の臆說を生ぜり。式部を誹るものは、或は、始、道長の妾にして、後、宣孝に嫁せるなりといひ、又は、式部は、源語かきし罪科によりて、死後、地獄に墮ちたりなどいへる、不稽の寃名をさへ、負はしむる者あるに至れり。

又、これに反して、式部を庇護せんとする學者の間にありては、式部が、源語を記すに、醍醐の朝より筆を起しゝは、彼の六



國史に記しつがむとの意にして、最、廣才の所爲なりと讃し、或は、人をして、仁義五常の道に入り、終には、中道實相の性理を悟らしめて、出世の善根を成就せしむるの本意なりとたゝへ、其他、莊子の寓言に基けりといひ、史記、通鑑を寫せりといひ、春秋の筆法に摸せりといひ、天台の六十卷になぞらへ、四諦の法門を思ひ寄せたりなど、儒佛の家々、自ら偏せる方に任せて、作者の本意を推し量れり。有名なる熊澤蕃山の如きも、上代の禮樂風俗を後世に傳へんがため、これを、人の耳目に入りやすき、淫靡の作物語に、かき入れたるなりといひ、水戸の安藤年山は、當時の頽風汚俗を諷刺せる書にして、勸懲敎戒の意を含めりと辨せり。

去れど、是等は何れも、源語の文辞に眩惑せるの余、強いて、作者を庇護せんとして、却て、式部其人の本意に背ける臆説なりと、評せざるを得ず。只、本居宣長翁は、其著はせる玉の小櫛にて、源語に關する從來の諸書を是非したる末、此書は、單に、當時社會の眞相を寫し出だせるまでなりとの、斷案を下されしは、さすがに、いみじき卓見といふべし。

源語の人物事實は、概、理想的に搆成せられたり。彼の源氏の君といひ、紫の上といひ、皆、當時の社會に於ける、理想より畫かれたる、才子佳人にあらざるはなし。源語はもと、多數の讀者を悅ばしめんとの主意によりて、書かれたる物語なるべしされば、時好に投じ、人情に合せしめんと勉むるは、古今を



問はず、此種作者の免れざる所なれば、これを以て、作者を罪せんは、實に酷なる仕方といはざるを得ぜ。只、當時の社會が、上下擧りて、淫逸惰弱の氣風、盛なりしの極、後世、元錄時代の風俗が、西鶴、巢林子の輩によりて、諷はれたるが如く、高潔玲瓏、玉の如き式部をしてさへも、遂に、其いみじき才筆を、かゝる事實にまで、汚さしむるに至りしもの、抑亦、社會其者の罪にあらずして、何ぞや。

## 第四、式部の識見

さすがに、該博なる學識によりて、修養薫陶せられたる式部の品性は、其温順謹慎なるに似氣なく、一種不拔の識見を有せしものゝ如し。當時は、人文未だ進まず、科學未だ開けず、其うへ、佛教の餘弊を受けて、人々、迷信の淵に沈み、固陋の域に安ぜし時代にありながら、高く時俗を脱して、かゝる識見を抱持せし式部其人こそは、彼の月に花に哀情を催ふせし、當時の腐腸男子をして、慚死せしむるに足るものあり。殊に、其婦女の心得を論ずるの一段に至りては、啻に、當時の社會に取りて、痛切なるのみならず、千歳の今日、教育ある婦女子に對しても、亦實に、頂門の一針たらずんばあらず、左に抄出せ



る日記中の數節を見よ、亦以て、式部が、如何に高き識見を有せしかを知るに足らむ。

徒然なるとき、亡夫の遺書をも、一二引き出だして見けるを、官女どもも集りて、式部は、かく好みて、漢書などを見るゆゑに、夫にも早く別れて、幸すくなきなり。何故に、女が漢字などを讀むにや、昔は、女は佛經讀むすら、制止せりなどいへるを、物陰にて聞くにつけても、物いみしたる人の行末、命、長かりし例やあると、いひ返したくは、思ひしかど、官女などのさいふも、皆我身の爲を、思ひてならむと思へば、うを爭はむも、遠慮なきやうなれば、何ともいはざりしが、啻に、命のみにあらず、萬の事、其人々によりて、格別に定まれるも

のにて、物いみすると、せさるとによりて、幸不幸あるにあらず。

他人が、如何に我を憎むとも、我はなほ、他人の幸をはかるが、君子の道なれど、こは仲々難きことなり。何となれば、慈悲深き佛さへも、三寶を誹る罪は重しと、說き給ふ。まして、やかく、濁深き浮世の人は、己につらき人に對しては、只何事もなき体にもてなし、表面平和に交るを以て可とすべし。其つらき人に對して、われ劣らじと、誹り爭ひ、又は、言語をも交へず、守りかはすと、何事もなき体にもてなすとの、差別によりて、其人々の心は、かくれなく、現はるゝ者なれは、たとひ、つらき人を惠むまでは難しとするも、せめては、



表面平和に交りたきものなり。

源語五十四帖の中にありても、殊に傑作と稱せらるゝ、雨夜の品定の一段に於て、式部は、例の艶麗緻密の筆を揮ひて、巧に女子の品性を批評し、しばく、警戒を示せりといへども、前にも既に辨せし如く、必竟源語は、修飾的物語にして、作者の本意を、誤なく見むとするには、此場合に於ても亦、日記によるの適當なるべきを、信ずるものから、今茲に、例によりて、日記中より、また、左の數節を抄譯せり。

すべて人は、温厚に、心長閑に、落ちつき居るを第一とす。かくてこそ、優美にも、また、奥床しくも見ゆるものなれ。又、少しは婀娜めくとも、本性の人柄、癖なく、傍輩の女などのた

め、見えにくき、容体などせぎたにあらは、惜きものにあらず。必竟、人の惜きは、本性の人柄、何となく、くせ〳〵しく、他人を輕蔑などする人のことなり。

二〇六 彼のほこり顔に、異様に口きゝ、又は氣色などことく〳〵しく、用意する人は、すべて、起居につけても、注目せらる。注目して、よく視らるれは、如何に用心するとも、其人の癖は、必ず見出ださるゝものなり。まして、や、其言ふところ、行ふところと、少しにても、一致せざるに於てをや。他人を輕蔑し、そしる人は、他人もまた、耳を立てゝ、其人のいふことを聞き、目を立てゝ、其人の行ふことを見るものなり。かく注意せらるれは、如何に、覆ひかくさんとすとも、自身の癖は、到



底、かくし得べきことならじ。

すべて、人を批難するはやすく、我心を用ふるはかたき業なるを、さは思はずして、先、我を賢とし、人を蔑にし、世をろしるうちにも、其人の心術は、見え現はるゝものなり。

殿上人等の立ちよりて、風雅のことなど、いひかけたるに、答ふる時、よくもわからぬ、古事、本文など引き出だして、由めかすは、却て、奇怪なることなり。されは、かゝる折には、只餘りに、無情ならず、又、餘りに、戯れをもせずして、程よく、ありたきものなり。しかし、此程よきといふこと、仲々難きものにて、これを、人の心の、有りがたきことゝはいふなり。

式部は又、後朱雀帝御誕生、五十日祝典の狀況を記せる所に

於て、服裝の事につきて、實に左の如く云へり。

其日の裝束は、たれ〳〵も、善、盡し、美、盡したるを、官女ども、口さがなくも、種々批評しあへり。されど、かゝる、祝典なりといふ如き、公なる場所にて、何か過失などの、少しにても、見えたらむときこそ、彼此と、撰りいでゝ、其用意有樣などにつき、批難もすべけれ、服裝などの優劣は、いふべきことにあらず。

嗚呼、身に綾羅を纏ひ、粉黛を施し、一向、外貌の修飾にのみ精神を奪はれ、反て、禮儀作法の何物たるを辨ぜざるのみならず、內心の卑汚醜怪なるに氣つかざる、滔々たる、世上幾多の婦女子、此一節を讀みて果して、如何の感かある。



## 第五、式部と清少納言

當時また其才藻學識に於て、式部と併べ稱せられたる有名の賢女あり、其名を清少納言といふ。父は肥後ノ守清原元輔といひ、梨壹五歌仙の一人にして、最、和歌をよくせり。榮花物語によれば、少納言は三條帝の女御淑景舍の官女なりとあれども、後世の學者は、概、一條帝の皇后定子に仕へ奉りて寵遇をうけし婦人となせり。

皇后定子と申すは、中の關白道隆の女にして、一條帝登極のはじめより、皇后に立ち給ひて、寵遇殊に深く、和歌はいふも更なり、すべて文學の道にもすぐれ給ひしこと、枕の草子に見ゆたり。されば、少納言の才學は、いたく御心にかなひしと

見は、曾て奏して内侍にもせんと宣ひしことありといふ。然るに、道隆薨じて、其弟道長、政をとりけるに兄弟の仲もとよりよからざりしに、道隆の子伊周、上皇に對し奉りて、不敬のことどもありしかば、これより、皇后の勢、頓に衰へて、少納言出世のことも、遂に行はれずして已めり。其後はどなく、皇后崩じ給ひしかば、少納言時を失ひて宮を退き、再、世に出でず。晩年にはいたく零落して、四國にさすらひたりといひ、或は、老後陋しき茅屋に住みけるを、道行く殿上人等、其貧窶を憫笑せしかば、少納言、中より呼びて、駿馬の骨を買ふものあるを聞かずやといひければ、笑ふ者、慚ぢて去りしことありともいひ、又一説には誓願寺に出家して、皇室の眷顧をかうふ



り、いみじき往生をとげたりともいふ。

少納言、性質機敏にして、才情溢るゝが如く、且、活潑にして頗、氣慨あり、當時其盛名、多く式部の下にあらず。彼の雪の晨に、皇后、左右を顧み給ひて、香爐峯の雪はいかにと宣ひし時、直に立ちて御簾を捲きしといふが如きは、最、人口に膾炙する美談なり。其著はすところの枕の草子は、自、皇后に仕へ奉りし間に見聞せる殿上の儀式、四季の風景をはじめとし、其他の人物現象につきて、興あるものを寫し取り、これに批評を下したる隨筆物にして、式部の源語と肩をならべて、古より雅文の双璧と稱せらる。實に文は心の鏡なりといへる如く、この草子の文勢思想などによりて、作者の人物を窺ふに、往

々故事古語等を引きて、盛に議論を上下し、男子をして、しば〳〵後に瞠若たらしむるところあるなど、意氣豪放にして、いたく我が博學多才に誇りしのみならず、其品行もまた頗、修らざるものありしが如し。これを、彼の謹慎貞順なる式部の性行に比し來れば、其全く相反せること、恰も物の両極端の如し、されば、式部を以て婦人らしき婦人なりとすれば、少納言は實に男子らしき婦人なりと評せざるを得ぎ。

式部と少納言とは、共に當時無双の才媛にして、其學識の該博なること、其氣韻の高尚なることなど、互に姉たりがたく、妹たりかたしといへども、其人物性行に於ては、彼が如く全く相反せるがうへ、一は一條帝の中宮に仕へ、他は其皇后に



仕へ奉り、二者その奉ぜるところを異にせし等の事情により、二人の交情は、決して親密なる能はざりしものゝ如し。たゞに親密ならざるのみならず、却りて、互に相疾視せしことありと見えたり。されば、温厚にして謙遜なる式部は、其日記に於て、少納言に向ひ、實に左の如き鋭き攻撃を加ふるに至れり。但、こは多分、少納言すでに宮を退きし後のことにはあるべきも、斯くまで鋭利なる筆鋒は、日記一篇の中、かつて他に其類を見ざるところなれば、式部が心の中、いかに少納言の人物品行を卑しみしかは、推して知らるゝなり。

式部は前に和泉式部、赤染衛門を評し、次に少納言に及びて、實に左の如き酷評を下せり。

清少納言こそ、いたく高慢ぶりたる人なれ。才學にはこりて、漢文など書きちらせど、よく見れば、未だ法にかなはざるところ多し。斯く、人に異ならむと勉むる人は、必ず見下げられて、其行末の不幸に陷る例なれば、いかでか、さやうのことをなすべき。また、あまり風流に傾ける人は、謹慎なるべき折などにも、同情を起しやすく、面白きことなど、いひかけられなどするをば、見のがすことなく、直に答ふるゆゑに、自然忌はしきうき名をも、流すに至るなり。うき名流せる人の行末、いかでか榮ゆる理あらむ。

而して、清少納言末路の歴史が、いかに悲慘なりしかを想へは、式部の慧眼、實に前見の明ありしといふべし。



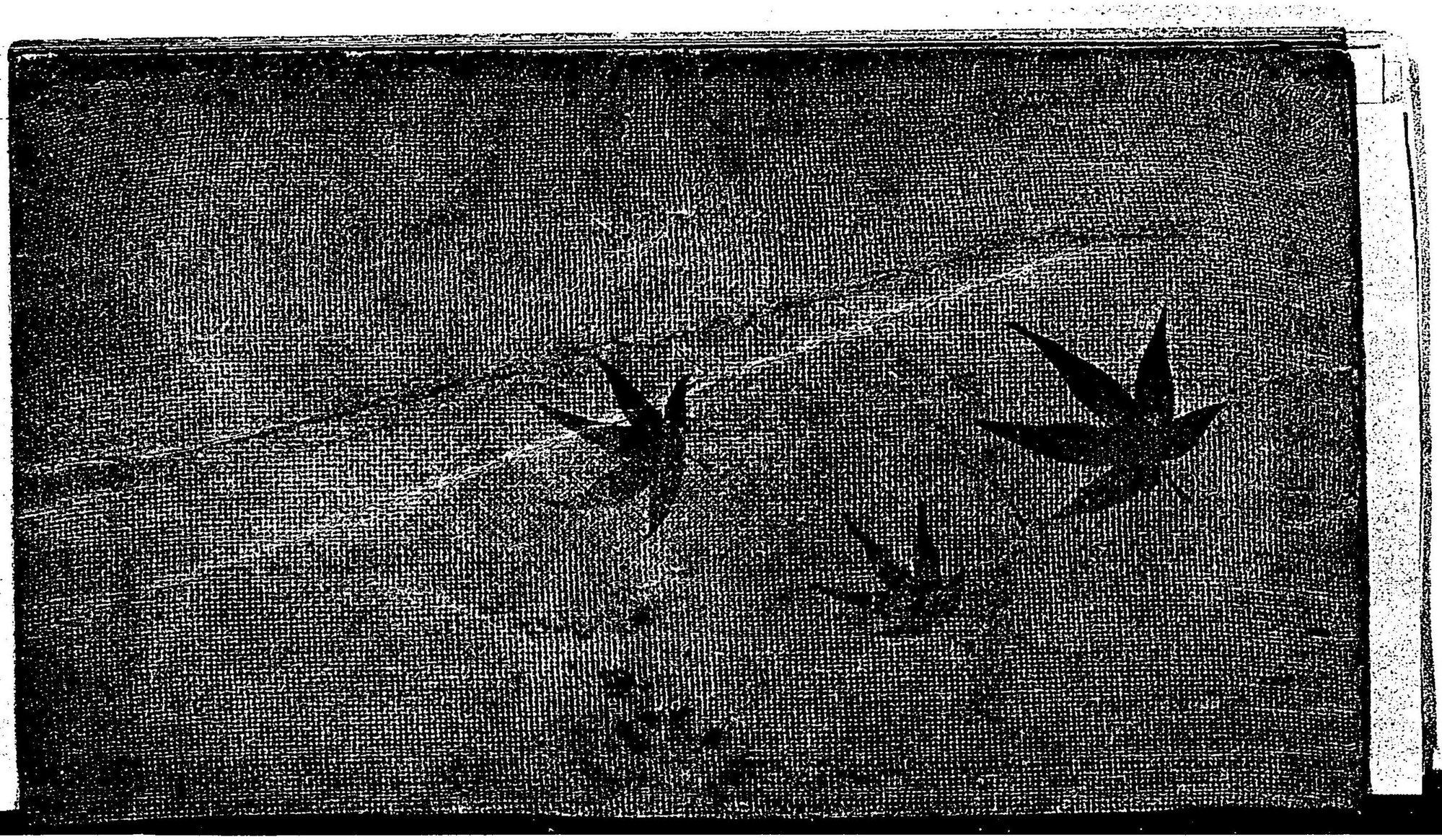
紫式部終

187
134

明治卅三年九月四日印刷
明治卅三年九月十日發行

著作者　青木義正
發行者　高知縣高知市種崎町四十六番屋敷　澤本駒吉
發行者　大阪市東區備後町四丁目七十八番邸　吉岡平助
印刷者　大阪市東區東新瓦屋町二百廿六番邸　梶原謙吉

高知縣高知市種崎町
發賣書肆　澤本書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡書店
東京市神田區錦町二丁目　明治書院

復製不許

（大塚製本所）